

妖怪（付喪神）と自然環境保護を
テーマとする現代の絵師

樽屋 タカシ

Taruya Takashi



1974年 鹿児島県生まれ。大阪在住。
毎日のように借金取りが土足で家に上がり込む子供時代を過ごし、空腹を満たすために海岸からワカメと貝を集めたり、水道や電気を止められるのも日常茶飯時。
必然的にハングリー精神を養い、手に職を求めるように、京都造形大学芸術学部美術科へ。在学中より、仕事として、巨大壁画や天井画の制作を国内外で行い、独自の色彩感覚による壮大な空間作品づくりが大きな反響を呼ぶ。

1999年 英国装飾美術Decorative Art技術取得。2000年 JET LABO設立。国内を始め、香港、上海などアジアを中心に、店舗内装など巨大壁画や天井画を制作。

2009年 日本古来より絵師達が綿々と伝承してきたアニミズム的な世界観を現代に引き継ぐ絵師として、古道具の妖怪といわれる「付喪神」を独自の視点で蘇らせた金箔・銀箔画への取り組みを始める。

【ぜひ取材をご検討ください】

・アートとエコについて ・妖怪と伝承文化について ・現代の絵師としての密着取材

取材のお問い合わせは、ホワイトナイト（株）久保まで TEL：03-5414-2831

◆絵師・現代アーティスト

◆妖怪（付喪神）と自然環境保護をテーマに
伝承文化である金箔画を今に蘇らせる

◆巨大壁画・天井画の制作を国内外で行う

【自然環境保護と付喪神（つくもがみ）】

さまざまな国で制作を繰り返していくうちに、樽屋氏は日本人としてのアイデンティティを何度も追求され、森羅万象には八百万（やおよろず）の神が宿るとするアニミズム的な世界観「古神道」を精神的ルーツとする自国を客観的に見つめるようになる。

「需要と供給が成り立つ一方、進まない自然環境保護への意識レベルの低下」。これが外から見た黄金の国と称されたジパングの姿であった。

「付喪神（つくもがみ）」とは、年月を経た道具や家畜に宿るとされる神々のことで、人々に畏怖の念を抱かせ、ものを大切に作る精神に立ち返らせてくれる存在。人の欲求によって大量の資源消費を繰り返してきた今、付喪神たちに学ぶものがあると思い、室町時代より絵師達が繰り返し模写してきた伝承を、樽屋は独自の視点と、自然環境保護にまで配慮した技法で現代に蘇らせた。



付喪神夜行図シリーズ

1「需給の増殖」2「無辺の再生」3「神々の行進」4「流通の躍進」

【作品素材にも、徹底して エコロジーの精神を貫く】

パネルは、大気汚染の原因となる揮発性有機化合物(TVOC)1%未満の接着剤を使った木製の総桐パネルで、作品を長く楽しんでもらうために表面湿布するコーティング材には、天然ヒノキチール配合の水性エコ塗料を使用している。

